

一 夜 山 の 植 物 採 集

伊 藤 静 夫

昭和53年9月2・3日、長野県植物研究会の例会が長野県の北部、上水内郡鬼無里村一夜山(1652m)で行なわれた。参加者は奥原弘人、望月精一、中山洲、和田清、小林富雄、清沢晴親、吉沢健、丸山利雄、斉藤定美、楯誠治、林一六、千村速男、臼井幸長、山越利晴の諸氏と幹事の伊藤の他に鬼無里中学校生物クラブ員5名が道案内を兼ねて参加した。

一夜山は戸隠西岳連峰に位置し、鬼無里村の中央にそびえ立っている。名前の如く一夜のうちにできたという伝説がある。基岩は粗粒完晶質な岩石で、安山岩と玢岩との中間的な性質を示す。植生はミズナラを主とする代償植生で、山頂付近には小規模なブナの疎林が残っている。今回は長野県植物誌作成のための調査の一環として一夜山の植物相を観察することになった。

第1日(9月2日)全員が集合したのは午後5時30分ごろであった。伝説の鬼無里に対する興味もあってか、予想を上回る参加者であった。鬼無里館の好意に甘えて、夕食は歓迎会的な雰囲気となり、多少のアルコールも入り、自己紹介や鬼女紅葉の伝説が話題に上り、なごやかなムードであった。夕食が終ってから、丸山利雄先生の戸隠の植物標本を見せてもらい、お互いに学習し合った。また9時からは長野地区の植物誌の会合を持ち、代表者会の報告や今後の計画について打ち合わせが行なわれた。

第2日(9月3日)天気予報では午後から山沿い地方は小雨が降るとのことであったので、予定より30分早めて8時に出発した。

一行は4台の車に分乗して、目的地一夜山に向かった。財又より林道財又線に入り、途中車を止めては採集した。林道わきにはナンブアザミ、シラネセンキュウが自生しており、冷沢にはミヤマカワラハシノキが小群落を形成していた。裏日本側気候下の植物相が目立ち始めるにつれて、林道は登りが急になり、車の底がつくようになった。

ついに海拔1,100 m付近の二又沢で車を降り、歩きながら採集することになった。林道の開発にともなう、一夜山のブナ林は伐採され、その後はミズナラ、ハウチワカエデ、ウリハダカエデ等の雑木林となり、計画的に植樹されたところはカラマツ林、スギ林となっている。林道の両側はこれらの代償植

生が続いている。

しばらくして一行は西越開拓地に着く。現在ここに居住する人はなく、農繁期のみ人が登って来て農事を行う。林道に沿った沢筋にはサワアザミ、オオバコウモリ、サワグルミ、ハルニレ、シナノキ等が自生している。

林道は山頂下のなだらかな斜面の所まで続いている。北斜面は、奥裾花ダム建設の為に採石された岩肌が無残な姿を表わしている。林道わきの隅あたりの良い場所にタガソデソウが生育しているのを奥原弘人先生が見つける。タガソデソウは分布の中心が長野県であり、若千山梨県の尾白川谷上流に分布する。鬼無里での分布は北限に位置するものと思われる。

道はやがて山頂に直行する急な登りになる。ところどころにブナの単木が残っており、林床には、エゾユズリハ、ヒメモチ、ホツツジ、オオカニコウモリ、オオバクロモジ等が目立つ。また風化した母岩が地表に現われているところでは、コキンレイカ、タガネソウが見られる。

一行は、正后をまわった頃、山頂につき昼食をとった。山頂からの眺めは格別で、鬼無里盆地、うねり曲る裾花川、遠く北アルプスの山々が一望のもとに見られ、疲れも忘れるほどであった。帰路は各自マイペースで採集しながら下山した。午後3時、出発点の鬼無里館へ到着、解散した。

○出現した種は前記のものを除くと下記の通りである。ツリフネソウ、オオバセンキュウ、モミジガサ、ミヤマトウバナ、タニウツギ、モイワボダイシュ、ミヤマキハダ、ヨグソミネバリ、ヤマナラシ、テンニンソウ、クロバナヒキオコシ、クマイチゴ、シュロソウ、カラハナソウ、オオネバクタジ、キダチネズミガヤ、ヒメタケシマラン、コミネカエデ、チマキザサ、ノブドウ、ハウノキ、ヒメノガリヤス、ハンゴンソウ、ヤナギラン、オカトラノオ、コブニレ、ミヤマハンノキ、オオバボダイジュ、ハイイヌツゲ、セリモドキ、オオイタドリ、ミヤマイラクサ、トリアシショウマ、ヒメアオキ、アラゲアオダモ、アカシノイヌツゲ、タチヒメワラビ、オシダ、ミヤマスマレ、ミツモトソウ、チダケサシ、ヤマニガナ、ミヤマアオダモ、ヤマボウシ、ミズキ。